

## 徳満澄雄著 『我身にたどる姫君物語全註解』

辛島, 正雄  
九州大学大学院 (博士課程)

<https://doi.org/10.15017/12068>

---

出版情報 : 語文研究. 50, pp.54-58, 1980-12-01. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

## 紹介

### 徳満澄雄著『我身にたどる姫君物語全註解』

辛 島 正 雄

鎌倉時代物語中随一の問題作『我身にたどる姫君』の全註釈が、徳満澄雄氏の手によって完成された。筋の複雑・文章の難解をもって聞こえるこの物語が、適切な注のもとに安んじて通読できるようになったのは、この上のない喜びである。

本書『我身にたどる姫君物語全註解』は、六百ページに及ぶ大冊であるが、まず「『我身にたどる姫君』について」と題する解題では、主題・構想・成立・作者など、多岐に亘る問題が取り上げられ、金子武雄・小木喬・市古貞次の諸先学の業績をふまえた上で、現時点での首肯すべき線が、要領よく示されている。ついで、註解では、全八巻について、金子氏蔵本を底本に書陵部本と校合して成った整理本文に、内容を要約した小見出しをつけて段落分けし、段ごとに細かい【注釈】が施される。「注釈にあたっては、語句や場面設定などの担っている伝統的な意味を探究することによって、文章の裏側に潜在する作者の真意を汲み取るように努めるとともに、物語の構造や登場人物の関係を分析することに力点を置いた」（「後記」）と言われるとおり、文字づらだけの解釈に墮することなく、

綿密周到な読みが展開されている。また、要所要所に【考説】の欄を設けて、物語の構成等、この物語の独自性にも言及しておられるのは、今後の研究の深化の一つの突破口ともなりえよう。巻末には、年譜・登場人物索引・語句索引も付され、読者への便宜が図られている。

このように、本書は、他の多くの鎌倉時代物語がまだ頭注本程度のもも持たない中で、一気に平安後期物語の注釈の水準にまで肉薄する精緻な労作なのであるが、なお、こうであったらと思う点が若干ある。そのうち二つほどあげれば、一つは、伝本が三本しかなく、しかも互いに補い合う関係にあることがわかっている以上、尊経閣本をも校合本として用いるべきではなかったかということ。いま一つは、【現代語訳】をも加えてほしかったということである。【注釈】がこれだけ詳しければあるいは不要だという向きもあるかもしれないが、この物語だからこそ是非ほしかった、というのが、偽らざる気持である。

さて、紹介とはいっても、本書のような場合、内容を要約し、研

有史に位置づけた上で諸子の参考に供するなど、まず不可能事であるから、ここでは、読みながら疑問を抱いた点などにつき、大小とりまぜていくつか示してみることにした。

卷六【一五】で、三位の乳母が自分の正体を隠して大式の君に話すことばの中に(括弧内はその部、分の【注釈】)

これは（御の弁）思ひかけぬ古人の、院の御時（嵯峨院が帝位にあつた時）より候へば、いとほしきことを心得させたまへらん。三位の君とて（三位は、自分のことを他人ごとのように、）御乳母にておはするが、おなじ御身のやうにさがりがたく思したれば（女帝と言を一身同体のよけがたくお思いに、）いささかもかの御事（宮の御を）をおろかに言ふ人をば、あさましうむつかりて、云々（424ペ）

とあるのだが、「心得させたまへらん」の後には、書陵部本・尊経閣本いずれにも、

とてみそかに参つる也かの大納言の君は是にさふらひ給ふ（影印本314ペ）

という文章がある。金子氏蔵本は未見であるので、「古典文庫」ならびに「物語文学の研究」に翻印されたままの本文なのか不明だが、もしそのままならば、他二本に従って右の文章を補うべきである。その結果、この人物関係は、次のように改めねばなるまい。すなわち、「これ」とは三位の乳母自身のことであり、「おなじ御身のやうに」は三位の乳母が大納言の君と一身同体のやうにの意、「かの御事」は大納言の君の御事のことになる。三位の乳母は「宮家に恩を売るつもり」など毛頭なく、ひたすら大式の君が二度と内裏に来ることがないよう威し付けているのである。

一次は、解釈のポイントとして相当に大きい問題となる箇所について述べてみたい。卷三【一九】「対の姫君の東宮参り近づく。二の宮、左大将も機をうかがう目前で対の姫君に迫る」と見出しされた一段である。

二の宮は中務の君という女房に対の姫君への手引きをさせるが、この女房は対の姫君付きではなく、女三の宮付きと考えるべきであろう。あと四五日で春宮参りというとき、二の宮は、「よき隙はあるまじければ、ただ二所おはせんに導け。言ふかひなく率て隠してん」(190ペ)と焦慮するが、「二所」とは「中務君と対の姫君」などであるはずがなく、対の姫君と女三の宮としか考えられない。さて、事件は、「殿の御宿直にて内にとまらせたまひぬる夜」(190ペ)におきる。

対の姫君は、昼より気分がすぐれず、昼の御座にやすんでいたが、夕方には気分もよくなり、女房の誘いや大将のすすめもあって、宰相の君と侍従をつれて「渡」る。ここを徳満氏は、昼の御座から夜の御殿に移るものと説かれるが、そうではあるまい。対の姫君が渡るのは女三の宮の部屋へであろう。前にも、「たまさかにも殿内にとまりたまふ夜な夜なは、こなた(対ノ姫君ノ部屋)に渡りたまひつつ、かたみにいみじうなつかしうのみ思しまつはれたるに」(192ペ)とあったことを想起したい。そうすると、二の宮と大将が忍び込んだ部屋には、対の姫君と女三の宮の二人がやすんでいたことになる。先の「ただ二所おはせんに導け」のことばどおりである。そして、大将が「さりぬべき隙やと、たばか」(190ペ)つたのも、対の姫君が目的だったのではなく、やはり女三の宮だったと考えるべきであろう。

二の宮は、対の姫君を捕えて首尾よく連れ去る魂胆だったのだが、姫君に激しく抵抗され、さらに渡殿のあたりで姫君付きの女房である侍従につかまり、なだめられて明け方に退散する仕儀となる。こちらについては、このとおりで問題は無い。では、もう一方の大将はどうなったのか。それは、次の一節でおよその察しがつくと思われる。

中務の君は、我だに知らぬさまに空寝をしたれば、御帳のうしろいとさわがしかりつる風の音に、身のみ冷え居たるに、渡殿さまに出でたまひぬにやと思ふを、またいとけ近かくいみじき御氣配を、いかなればと心得ねど、ただいと空知らずすばかりと、引きかづきたり。(195ペ)

傍線部については何も注されていないが、徳満氏の最初の読みを継続するかきり、解釈不能と言わざるをえまい。こゝは、二の宮が対の姫君を連れて渡殿の方に行ってしまったのだから、残っていないのは女三の宮ひとりのはずが、大将の忍び込んでいたことを知らない中務の君は、また男女の揉み合う様子が察知されたので不審に思っているのである。こう解釈すると、それに続く「括弧内に適宜用す」

宮(二)は、あさましかりつるを逃れぬ(対の姫君)と、うれしう思しわななきつるかひなう、いみじきに、ましていかなる御心惑ひかはあらん(姫君は興奮のおさまらない二の宮が、次に以前、まだも帰りおはせぬを、御心しらひにやとつらう思せど、なかなか今は、ありしばかりのものなまきけなく、よろづを聞き入れたまふまじき御身ならぬにや(姫君は以前は人情を解せず、人の言ふことかえってそういふ)、人にだに知らせずをこつりやりてんとぞ、

思し構ふる。ながき夜なれど(以下、二の宮)、くらぶの山のかひなさは、ありしより殊に心のみまどひて、聞こえやりたまはずむせかへりたまふまぎれに、云々 (195ペ)

という一節は、大将が思いを遂げたことを叙しているのだということになる。「宮」は女三の宮であり、以下はその心中。「御心しらひにや」とは、対の姫君が大将と自分とのことにいらぬ氣を利かせたのか、と疑っているわけである。「なかなか」以下は、関白の北の方となつてからは皇女の時のように冷たくつばねてばかりいるわけにもゆかぬ身であるからか、の氣持。「人にだに知らせずをこつりやりてんとぞ、思し構ふる」というのは、同じ巻の【三】で、大将(當時はまだ中納言)が結婚前の女三の宮に迫つた条に、「(女三ノ宮ハ)あさましいみじと思し入りたるはては、御手をうちたかせたまふに、人おどろきて参り寄る氣配すれば」(144ペ)とあつたのを意識しているのだと思われる。「くらぶの山」は、「源氏物語」「若紫」巻、

何ごとをかは聞こえつくしたまはむ。くらぶの山に宿も取らまほしげなれど、あやにくなる短夜にて、あさましうなかなかなり。(全集本(1)305、306ペ)

という、源氏と藤壺の密通での表現を襲っているであろう。「まぎれに」は下文には続かず、ここで大きく切れ、まさしくへものまぎれ」のあつたことを匂わせているのである。

右の読みが正しいとすると、巻三巻末の次の一文が問題になる。女三の宮は、あさましかりし夢のまよひに、いまさらに御心うごき、我が御契りも心うく思しまどひし名残、まことにくるしうのみ思さるるを、大殿は、いつしかめづらしううれしきに、

御心をさわがしたまへど、心の鬼、うたてのみ申し知らるべし。(204 べ)

女三の宮は懐妊する。誰の子なのか。徳満氏は、金子氏の系図を踏襲して、関白の実子と理解されているのだが、大将の子とするのが妥当と思われる。「心の鬼」なる語も、「紅葉賀」巻の「宮(＝藤壺)の、御心の鬼にいと苦しく」(1)398 べ)などの例を想起したいところである。

このように見てくると、巻四で後涼殿女御となる女三の宮の娘は、実は大将との間の罪の子だということになり、皇后宮一女三の宮―後涼殿という母子三代は、罪の子を生むという悲しい宿世に支配された女系ということになる。「この物語の基本構造は、源氏物語における光源氏と藤壺の宮との密通事件をモデルにしている」(「解題」)と言われるが、巻七の宮の右大臣が後涼殿に通じる条が、「くらぶの山のやどりとかや、焼の露けきなどは、ただ異人びとの御うへにて押し置るべければ、みな洩らしつ」(477 べ)と、明白に「若紫」巻を意識しているのに先立って、その母である女三の宮も、同じ悲運に見舞われていたのであった。

最後に、引歌・引詩について二述べる。

・かねてみな思ひまうけたまへれば、葉山の繁りにもさはらず、  
たづね入りたまひつる。(477 べ)

・思ひ入る端山繁山かきわけてなげきぞふかき道はまどはず  
(491 べ)

「解題」には、右の二箇所引歌を為家の「思ひ入る道をばやすく聞きしかど逢ふにはさはる端山繁山」に求めて、この物語の成立年代の上限を、為家の歌が詠まれた寛元三年とする新見が出されている。

のだが、従いがたい。むしろ、為家の歌の本歌でもある、筑波山端山繁山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり

(「新古今和歌集」恋一)

という源重之の著名な歌をこそ引歌と認むべきであろう。前の例について、徳満氏は、「為家の詠歌以外は、二句以上の重なりがなく引歌とすることができない」と言われるが、重之の歌に拠る表現と見るべきであることは、両者を見較べるなら、あまりにも明白である。さらに、重之のこの歌は、「源氏物語」や「狭衣物語」において、つとに用いられているのであって、「葉山の繁り」なる語から直ちに重之の詠の想起される下地が十分に整っていたと考えられる以上、それを斥けてまで新しい歌に拠ったとするのは無理だと思われる。したがって、これは成立年代推定の根拠たりえないということ、寛元三年上限説も白紙に戻すべきであろう。

巻四【一一】の出典未詳の引詩「明月光の焼の」(237 べ)は、「和漢朗詠集」下・行旅の源順作、

行々重行々 明月峽之晓色不尽

眇々復眇々 長風浦之暮声猶深

の一節を口ずさんだもの。

以上、疑義を挟むことに終始してしまい、幾多の難解な箇所を見事に解き明かし、従来の研究を何歩も前進させられた徳満氏の労に對して非礼にわたる点多かったことと思うが、ご海容を乞う次第である。

それにしても、いうまでもないことだが、注釈という作業には終りはしない。ましてやこの物語の注釈は始まったばかりである。もち